博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	位田　将司
論　文　題　目	横光利一の創作及び文学理論の研究 ―「認識論」と「存在論」の理論的分析を中心に―

審査要旨

本論文は、論者がこれまでに研究して来た、大正末から昭和にかけて活躍した代表的な文学者横光利一の文学の営為を、その小説・評論を対象に、ほぼ時代順に詳細に検討し、その推移を意味付けた研究の集大成であり、400 字詰め原稿用紙約 500 枚の分量を持つ。全国誌に載せた査読のある論文 3 篇を中心に、書き下ろし部分を含む全体は、12 章によって構成され、まず論文全体の視点を提示した「序章 「根拠＝ground」が揺れる―」から始まる。論者は、横光が、若き日に遭遇した関東大震災によって、人間の認識論的な構造自体が変化したと考えていたことに注目し、そうした感性が同時代の哲学・思想とどうかかわりを持つのか、さらには横光の構築した文学理論の内実がどうであったかを、丹念に辿ろうとする。そしてそれは、横光のテキストがどのような歴史的・文学史的な文脈から理論的に構築されたのかを明らかにすることの重要性を示している、とする。ここで大切なのが、友人由良哲次を介して接した新カント派の哲学による「認識論」であり、「純粋小説論」以降の時期のおける、哲学者三木清を介して接した「存在論」との関係である。論者は、「認識論」から「存在論」への関心の変化こそ横光の生涯の営為である、という見取り図を示す。論の基盤がこうして、明らかにされるのである。

「第一章・横光利一における「形式主義」―「個性」という形式について―」は、横光における「形式主義」が、どういう理論的な根拠から構成されていたかを、初期の評論「新感覚論」から分析し、友人由良哲次を通して知ったカッシーラーなど新カント派の哲学者の論述からの影響を検証する。マルクス主義文学との距離を保つために、横光が「個性」という言葉に焦点を当てていたことが重要であることを辿ったものである。

「第二章・「日輪」の構想力と「神話」の構造―「形式主義」を予告する―」は、出発期の問題作「日輪」を対象に、横光が新カント派の哲学の他に生田長江の影響のもと、「特定」の出来事を「普遍的」な形式のもとで表現するという「神話」の構造を摂取したことが大きい、と論じている。「形式主義」の生まれる基盤が、こうして明らかにされるのである。

「第三章・『上海』における「共同の論理」―「形式」・「商品」・「機械」―」は、上海という都市に、「共同の論理」という「形式」を見ようとした横光のあり方を論じている。「形式主義」の理論を体現する都市として、上海が注目されたのであり、その人間・思想・政治・経済のあり方こそ、横光において文学の格好の舞台だったと考えている。

「第四章・『機械』という「倫理」―「形式主義」と「暴-力」―」は、小林秀雄の『機械』評を媒介にし、「倫理」という概念から作品を分析する。機械の持つ疎外的なあり方からどう主体を回復するかが問題となり、横光の言う「四人称」が、その問題とどうつながるかが分析されている。

「第五章・「転回」―「認識論」と「存在論」との対決―」は、ハイデガーの「存在論」、その影響を受けた三木清の思想から影響を受けつつ、横光が「認識論」から「存在論」へと転換して行く経緯が分析される。「純粋小説論」に見える新しい考え方が成立する背景として、文学を形作る「大衆」が浮かび上がってくる、と論じている。

「第六章・「純粋小説論」の「交互作用」―複数の弁証法をめぐって―」「第七章・「純粋小説論」と「近代の超克」―「四人称」という「戦争」―」の二章は、分析が難しい「純粋小説論」に正面からぶつかった部分で、論者の力が発揮されている章と言える。論者は、「純粋小説論」に二つの側面があるとし、絶えずその相反する側面の論理的帰結に眼を注ごうとする。「差異」を維持する理論と、「差異」を無化する理論が、どう「純粋小説論」に内包するかが明らかになるのである。「純粋小説論」を、横光の思想の展開の中で位置付けつつ、その思想基盤の検討から説明するその方法は堅実であり、論者の研究姿勢を示すものとなっている、と言える。

「第八章・『欧洲紀行』という「純文学」―「純粋小説論」と自意識をめぐる「穴」―」は、これまで単独で論じられることの少なかった『欧洲紀行』を取り上げ、横光のヨーロッパ旅行の意味を考える手がかりにしている。昭和十年前後の「文芸復興」の機運に対して、横光は「引き裂かれた自意識」の問題を見出したとする論者は、ヨーロッパと日本

の間で引き裂かれた横光の意識が「純粋小説論」から長篇『旅愁』への行程に見えるとし、俳句に関心を示していた横光がヨーロッパで突然俳句を詠まなくなった事実に注目、俳句が内在させる「純文学」の写実的リアリズムでは表象出来ないヨーロッパ自体を、「穴」として表現している点を分析する。

「第九章・『旅愁』という「通俗」―自意識をめぐる「立つてゐる」もの―」は、抱え込んだ「穴」の問題を埋める表象として、『旅愁』では「立つてゐる」ものを形象化している事実に注目し、その中心的な意味を分析する。

「第十章・『微笑』という「視差（パララックス・ヴュー）」―「排中律」について―」は、戦後の問題作『微笑』を取り上げ、二項対立の二項を共存させる「形式」を思索していた横光が、生涯の最後に、「排中律」にぶつかった点を跡付ける。ここで援用されたのが、「視差」（パララックス・ヴュー）という概念である。対立を構成する差異を把握する方法として、この「視差」が問題となる、と論者は主張する。

「終章・「故郷」は「異国」である」は、全体のまとめに当たる部分であり、常に前提となってしまっている文学の「故郷」から「異国」へと身を剥がすように創作してきたが、「異国」に赴くこと自体が、横光にとって「故郷」であったのではないかと、結論付ける。

以上概略を整理したが、「認識論」から「存在論」へという見取り図を設定し、自身の研究のスタンスを取ったために、見えなくなったり、やや弱くなった論点があるのも否めない。横光の置かれた歴史性を十分見据えずに、形式性に重点が置かれたため、やや事実の確認のレベルで論じられている部分もみえる。横光の転回を論じるにしても、それをもたらしたものを明らかにするためには、本論で扱われた作品以外の小説テキストのていねいな分析が、更に望まれる。文学史的なパースペクティブも更にほしいし、たとえば「シェストフ的不安」との関わりひつつとっても、更に考える課題はあろう。

こうした問題点は、今後の論者によって深められるはずであり、本論文はその基礎固めとして、横光の思想的背景の変容を軸とし、主要な作品・評論を対象にその内実を詳細に跡付け、これまでのあいまいで問題点多い文学史像を検討しつつ、横光の文学論にまで確実に論じて、自分なりの横光像を確立した達成となっている。本論文の達成は、すでに学会でも評価されており、今後の昭和文学研究に資することが多いと判断される。よって、本論文が「博士（文学）」の学位を授与するのにふさわしいものであると認定する。

公開審査会開催日	2012 年 6 月 28 日		
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	氏 名
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	博士（文学）早稲田大学	中島 国彦
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授		高橋 敏夫
審査委員	早稲田大学政治経済学術院・教授		宗像 和重
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	博士（文学）早稲田大学	十重田 裕一
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	博士（文学）早稲田大学	鳥羽 耕史